人間科学の臨床的適用の原則

石川　憲彦（東京大学小児科）

母子関係は，人間関係の中で独得の位置を占めている。過去，母子関係論的知見が，臨床場面での応用に必ずしも成功をおさめてきたといえないのは，人間関係論自体の臨床応用への原則が未確立であることとともに，この特異性が大きく作用している為と考えられる。前年度先行報告の分析を基に，「人間関係論の臨床的適用の原則」を仮説的な尺度を設定したが，この尺度に従って，その特異性の占める位置を検討したい。

A　学際的ベクトル

方法論の問題としては，生物学的には，遺伝子構造上雑にいえば「半分は自己」である。医学的には，胎内，出生後を通じ，特殊な「共存」関係にある。心理教育学的には，育児という独自の二者の関係にあり，社会学的には，特殊な最小集団である。こういった対構造が，おのおのの方法論の枠内において持つ意味と，全ての方法論を越えて共通点として確認できる意味の検討が必要となる。E. H. Erikson の指摘以後も，精神医学，文化人類学などの分野以外では，この点に留意した多層的ベクトルの相関における単一的ベクトル内の位置付けは，充分になされていない。

B　価値主導型ベクトル

Aにおける多層性の欠如は，価値の問題においてのあいまいさと共通している。たとえば，望ましい母子関係の暗黙の前提化が，あたかも公理のごとく各研究者によって，その前提を異にしつつ，言葉としては共有されている。すなわち母にとって望ましい母子関係と，子どもにとって望ましい母子関係は，必ずしも同一ではないであろうし，関係にとって望ましい母子関係は，どういった価値によって仮定しえるのかは，E，Fの問題ともからみ，多様な前提を必要とする。

たとえば，本研究班詫摩武俊氏の「発達期待に関する研究」は，「良い子」像に対する，または，そこに含まれる「悪い子」像を研究対照に加えることで，価値の問題にせまろうとする数少ない貴重な研究の一つとなっている。

ただ，たとえばアンケート設問における抽象的用語（価値の研究上やむをえない側面はあるが）もまた，効率論による「慎重さ」，社会価値における多様な「慎重さ」，個人の行動等における「慎重さ」，思想としての「慎重さ」のように，多様なベクトルで伝えられる「慎重さ」を前提にしなければ，価値の一面化を前提としてしまう危険性をもっている。

価値の問題は，大人と子どもが必ずしも対等な存在としてみなされておらず，現実に機能していない以上，母子関係論においては価値論的に「慎重さ」が要求される。

C　倫理的ベクトル

研究の前提としても，調査の方法としても，そしてなにより臨床への応用として，倫理性は強く問題となる。それは，プライバシーの問題，人体実験の問題としてすでに提示されてきた種々の問題以前の倫理観にも逆上る。たとえば，「非行」を前提として否定的に語る研究が少なくないが，アプリオリに否定的仮説をたてること自体が，すでに倫理的には問題なのである。この点では母子という対関係の倫理もまた，問われている。

D　論理的ベクトル

今回までの報告においては，他のベクトルの所でのべるような多層性と多様性を秘めた問題に対する論理体系は存在していない。それは，すでにA～Cでみてきたような，課題への仮説，方法，評価の中に秘む矛盾への解答が存在していないことによる。本研究班でも，医学生物学的研究に認められる単一的ベクトルで，母子のどちらかを対照とする方法論における論理性以外は，かなり多くの論理矛盾を内包している。

E　主体の問題としてのベクトル

Bの問題は，主として研究段階の問題であるが，臨床応用にあたっては，仮に単一的ベクトルのみにおいて自己完結した知見であれ，矛盾を内包したまま多層なベクトルにわたって仮定される知見であれ，応用を計る主体と受ける主体の問題がからんでいる。従ってFの研究者の位置は，とりわけ介入の問題として問題となる。

G　時間的ベクトル

短期の反応の結果と長期の反応の結果の相関に関しては，すでにJ. Bowlbyに対するM. Rutterや，J. H. van den Bergの反論において指摘されている。この点については，本研究班内で，岡　宏子氏が研究されている課題の成果を待って検討したい。

A～Gにのべたことは，人間が人間の理解の中で関係をみる以上，解決をみることは難しい。しかし，矛盾や限界を明確にしてゆく作業を行うに，知見が一人歩きすると，「自閉症の心因論」が1960年代の臨床応用においてもたらした様々な悲劇的結果をくり返すことになってしまうと思われる。Hのベクトルは，そういった点に対する仮説的作業として検討中である。(以上報告として提出した拙著を参考にしていただきたい。)

検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります

母子関係は,人間関係の中で独得の位置を占めている。過去,母子関係論的知見が,臨床場面での応用に必ずしも成功をおさめてきたといえないのは,人間関係論自体の臨床応用への原則が未確立であることとともに,この特異性が大きく作用している為と考えられる。前年度先行報告の分析を基に,「人間関係論の臨床的適用の原則」を仮説的な尺度を設定したが,この尺度に従って,その特異性の占める位置を検討したい。